

平成 28 年度日本水産学会中四国支部ミニシンポジウム

瀬戸内海の漁業資源のいまとこれから

日時・場所： 2016 年 10 月 23 日（日）9:00-12:00

コンピーナー： 山本民次（広大院生物圏科），今井千文（水産機構水大校），関 伸吾（高知大農）

プログラム

- 9:00-9:05 開会挨拶 山本民次（日本水産学会中国・四国支部長）
座長 今井千文（水産機構水大校）
- 9:05-9:40 浮魚資源の動向と諸問題 石田 実，河野悌昌，高橋正知（水産機構瀬水研）
- 9:40-10:05 底魚資源の動向と諸問題 阪地英男，山本圭介（水産機構瀬水研）
- 10:05-10:35 人工魚礁の蝸集・増殖機能とその発現過程について 野田幹雄（水産機構水大校）
- 10:35-10:45 休憩
座長 関 伸吾（高知大農）
- 10:45-11:15 山口県神代地先における岩礁性藻場造成とその効果 杉本憲司（宇部高専）
- 11:15-11:45 数値モデルによる人工藻場の供給サービス（漁業的価値）に関する評価の試み
山本民次（広島大院生物圏科）
- 11:45-12:00 総合討論 今井千文（水産機構水大校），関 伸吾（高知大農）
- 閉会挨拶 山本民次（日本水産学会中国・四国支部長）

開催趣旨： 瀬戸内海の漁獲量は大きく減少し，スーパーマーケットに売られる魚介類の多くが輸入物で，我々は新鮮な地のさかなの旨さを忘れかけている．漁獲量の減少は基本的には環境の劣化による資源量の減少があり，取れない・儲からないことにより，若い漁業者のリクルートは進まず，高齢化が加速している．環境劣化のメカニズム・プロセスは複雑であるが，ここでは資源量の定量的把握のための研究成果，資源量を減らす要因の洗い出し，さらには平成 27 年 10 月の瀬戸内海環境保全特別措置法の改正によって今後ますます注目される人工魚礁や藻場造成に関する水産土木的な取り組みなどを紹介することで，瀬戸内海の漁業資源の将来について議論する場とすることを目的とする．